

# 都市と掘割の変遷－水郷柳川を対象として－

千年村研究ゼミ B4 鈴木友芽子

## 目次構成

### 【序論】

- 0-1 研究背景
- 0-2 研究目的
- 0-3 研究方法と論文構成
- 0-4 既往研究
- 0-5 基礎情報
  - 0-5-1 立地
  - 0-5-2 行政区域の変遷
  - 0-5-3 地勢
- 0-6 掘割とクリーク

### 【本論】

#### 第1章 古代～中世

- 1-1 はじめに
- 1-2 筑後平野の成り立ち
- 1-3 人が住み始めたころ
- 1-4 条里制
- 1-5 荘園
- 1-6 小結び

#### 第2章 近世

- 2-1 はじめに
- 2-2 田中吉政
- 2-3 田中吉政による政策
  - 2-3-1 柳川城・城下町
  - 2-3-2 支城配置と交通網の整備
  - 2-3-3 新田開発と慶長本土居
  - 2-3-4 治水事業
- 2-4 小結び

#### 第3章 近代～現代

- 3-1 はじめに
- 3-2 広松伝 郷土の川に清流を取り戻そう
  - 3-2-1 広松伝略歴
  - 3-2-2 掘割再生活動の経緯
  - 3-2-3 広松伝の思想
- 3-3 「水辺の遊歩道」事業
- 3-4 小結び

#### 第4章 考察 柳川の掘割

### 【結論】

参考資料・文献  
図版出典  
巻末資料

## 【序論】

### 0-1. 研究背景

私は九州の水郷として有名な柳川を訪れた際、掘割が街の中に縦横無尽に張り巡らされている景色に心を打たれた。柳川の街に惹かれたことが本論文の率直な発端である。

日本国内で考えてみると、河口付近、すなわち沼地やデルタ部分に位置する、水の環境に富んだ立地の都市は多い。しかしながら、それら地域のほとんどは川や水路の埋め立てにより、水と都市の関係を絶って、現在に至っているといえる。水辺の都市、すなわち「水都」の研究を行う陣内秀信の著書内においても、「日本ほど、都市づくりに長期的視点を持たず、これほど大切なはずの水辺空間をせっかちに切り捨てた国はほかにない。・・・」(『水都学Ⅰ』)と述べている。

こうした中で、現在も水辺空間が残される柳川の都市を対象に研究することは意義のあることであると考えた。

### 0-2. 研究目的

陣内の行う水都の学問、すなわち「水都学」の方法論としては、「空間や場所を扱うわれわれの研究にとって、〈時間〉すなわち歴史の中での変遷、〈空間／環境〉、すなわち生態系に裏打ちされた場所の形成、という二つの視座が重要であり、その複合として、それぞれの場所の中に歴史の重層が見られる、と考えたい。そのうえで、水都(水辺都市)のあり方を、古今東西の都市、地域を対象に、〈時間／歴史〉と〈空間／環境〉の軸をベースに、〈形態〉、〈機能／役割〉、〈意味〉の視座から解読する、というのがわれわれの方法論となるであろう。」(『水都学Ⅰ』)としている。

これを参考に柳川の地において、〈時間／歴史〉と〈空間／環境〉の軸をベースに、掘割の、〈形態〉、〈機能／役割〉を明らかとする。

### 0-3. 研究方法と論文構成

陣内は、「〈水〉の多様な機能といっても、それは古代、中世、近世、近代諸段階、ポスト近代の20世紀末から21世紀と、時代とともに変遷を見せた。・・・古代、中世には、コスモロジーの存在がより強く認識され、地形と結びついた大スケールでの空間の座標軸が存在した。」(『水都学Ⅰ』)と述べていることから、

第1章では、古代～中世

第2章では、近世

第3章では、近代～現代

と時代区分を分け、掘割の、〈形態〉、〈機能／役割〉を明らかとする。

第4章では、1章から3章をふまえ、柳川における水と都市の関係の持続要因を考察する。

### 0-4. 既往研究

#### ◆柳川の研究

柳川の掘割、環境についての研究では、菊地成朋・牛島朗・丸茂悠・黒山崇らにより、柳川の諸地区・集落において集落・住居と掘割の関係性の特に近代化前～現在にかけての変容について述べられている。掘割に対しての住居の並びや掘割までのアプローチなどの近代化後の変容と集落ごとの特性を考察している。しかし、柳川を水辺都市として古代から現代の変遷を追うものはない。

### 0-5. 基礎情報

#### 0-5-1 立地

柳川市は、福岡県の南部に広がる筑後平野の西南端、また「筑紫次郎」の異名をもつ九州を代表する河川である筑後川と、その南にある矢部川の下流・河口域に囲まれた三角州に位置する都市である。

#### 0-5-2 地勢

##### ①有明海

柳川市の面する有明海は、日本で最も潮の干満差が大きい海であり、特に湾岸部において著しい。その干満差は、最大6mにもなる。この激しい潮の干満運動によって、地層は極めて軟弱な粘土層の有明粘土層が広がっている。

### 0-6. 掘割とクリーク

掘割とクリークの言葉の定義をする。本論文では、クリークは自然発生の川・水路、掘割は人工的に掘られた水路をさすこととする。

## 【本論】

### 第1章 古代～中世

#### 1-2. 筑後平野の成り立ち

柳川市は縄文時代、海の底であった。弥生時代に入ると、徐々に海面の下がっていく海退が進み、さらに筑後川が運んできた土砂によって造陸のスピードが速まっていく。筑後川をはじめとして矢部川などの諸河川からの土砂運搬作用、有明海特有の干満作用によって筑後平野はますます発展していくこととなる。川と海其自然作用が平野の生成に大きく影響している。川と海其自然作用、有明粘土層の軟弱地盤から、この地にクリークが発生したことは必然的であったとわかる。

#### 1-3. 人が住み始めたころ

柳川にみられる弥生時代の遺跡を地図上に示すと、現在の中心市街地よりも内陸で弧を描くように分布しているのがわかる。これらの場所の掘割は無秩序な形をしているのがわかる。また、行き止まりの部分も多く、特にそこは掘割の面積が大きい。また、柳川掘割物語描写より、柳川の地の軟弱地盤上で人々が定住をするためには、クリークを利用し、掘割を掘り、土盛りをして平野を拓くことが必要不可欠であったとわかる。掘割には、排水、貯水の役割がみられる。

#### 1-4. 条里制

筑後国の統治を行った人物として最初に確認されているのは、道君首名(みちのきみおびとな)であり、彼の功績を記した『続日本紀』より、「・・・国守として人々に生業を勧め、規則をつくり、農業を教えた。・・・また、彼は、堤や池を造成して灌漑(みぞ・水路)を広げていった。肥後国の味生池や筑後国のあちらこちらにある堤や池は、みな彼が作ったものである。・・・」と記されており、この時代、首名によって掘割が生産基盤としてひかれ、また拡大がなされたことがわかる。掘割に灌漑としての役割が生まれたといえる。

首名は715年に筑後守に任命され、この地に「条里制」を実施した。柳川市内の地名にはこの条里制に関連する地名がみれる。これらをもとにし、筑後国における条里制の復元が日野尚志の研究によって行われており、これをもとに現在の柳川市の地図に示した。現在の柳川市の北部から南東にみられる直線的な掘割は条里制のなごりとして掘割の形態に残っていることがわかる。



## 1-5. 荘園

平安時代後期以降、荒野の開発とそれに伴う荘園の拡大は各地で見られるが、九州などの遠隔地は特に大規模なものであると言われている。現在の柳川市域にかつて存在した三瀧荘、瀬高下荘を取り上げる。

### 1-5-1 三瀧荘・1-5-2 高瀬下荘

それぞれ古文書、高瀬下荘においては現在地との比定が鏡山猛の研究をもとに、比定地を地図に示す。

それぞれの荘園の範囲までを断定することはできないが、大まかな荘園の位置をみていくと、条里制の外側に位置し、また、集落ごとのまとまりで無統制で高密度な掘割をみることができる。

## 第2章 近世

### 2-2. 田中吉政

関ヶ原合戦にて石田三成を生け捕りにした吉政は、筑後一国を与えられ、1601年に筑後一国の領主となり、柳川に城地を定め、柳川、筑後の近世化に尽くすこととなる。

### 2-3. 田中吉政による政策

#### 2-3-1 柳川城・城下町

現在の城域は、内堀は埋められ、主郭部は学校の敷地となっているが、当時の絵図と比較しても掘割はほぼ変わらず、主郭部を中心に囲うようにして掘割が形成されている。

また、城下の様子としても当時の絵図から画一的に整備された町の展開がわかっている。城内街の位置にみられる掘割は、道・宅地に並行な形態である。また防衛の役割を掘割が果している。

#### 2-3-2 支城配置と交通網の整備

吉政は本城を柳川に定め、その他多数の支城を配置した。本城柳川と最も重要な支城が置かれた久留米の間に、新たな「幹線道路」を整備していることがわかっている。造設される道の両側には、堀が掘られている。「その頃の道路は国防のため、双方に堀を掘ったものが多かった。柳川から久留米に通ずる道路も、枝光から津村・小保・新地を経て肥前佐賀に通ずる道も皆双方堀であった。」(山門郡誌) この道が現在久留米と柳川を結ぶ県道の前身であり、「田中道」と俗称されている。

このように道路網の整備は本城柳川と各支城を結ぶかたちで整備された。

ここからも藩としての都市基盤の整備に伴った掘割は防衛の役割が見られる。

#### 2-3-3 新田開発と慶長本土居

吉政の政策として、開発の推進が著しい。この頃の古文書から「汐堤」・「川堤」といった言葉が見られ、この

頃盛んに堤防が造設されていたことがわかっている。

「慶長本土居」とは、慶長七(1602)年に造られたとされている堤防であり、吉政によってそれまで個々にあった潮受け堤防を連続・補強したものとされている。位置は絵図によって、三瀧郡酒見から山門郡鷹尾にいたる県道767号にあたりとされている。地図上でみると、その後の干拓事業がこの慶長本土居を皮切りとして進められ、うろこ状に広がっているのがわかる。また掘割をみると堤防に対し直線的に伸びた形状が見られる。

#### 2-3-4 治水事業

吉政は、洪水ごとに流路を変える天井川である矢部川の治水事業に着手している。また、用水にも深い関心を持っており、庄屋に対し、村々を指導して、堤防、用水について万全を尽くすように申し立てている。

吉政は用水工事では、花宗川の開通に着手している。矢部川を花宗堰(八女市)で堰き止め、北岸の上妻・下妻両群と三瀧郡一帯の水田に灌漑し、従来からあった矢部川の分流を整備し、従来の小川や溝、堀割などをこの基幹水路に結びつけ、総合的水利体制をつくりあげた。「樋管」と「堰埭(エンタイ)」といった掘割の細かな水利施設も近世初頭に完成された。

これらにより、灌漑の役割が飛躍的に高まったと考えられる。

### 2-4. 小結び

第1章第2章を通して、条里制の開始から江戸時代末まで、大体的ではあるが掘割の〈形態〉は統治の変遷ともなって、変化することを明らかにした。

この頃整えられた都市基盤は、現在においても同様の骨格を見せている。

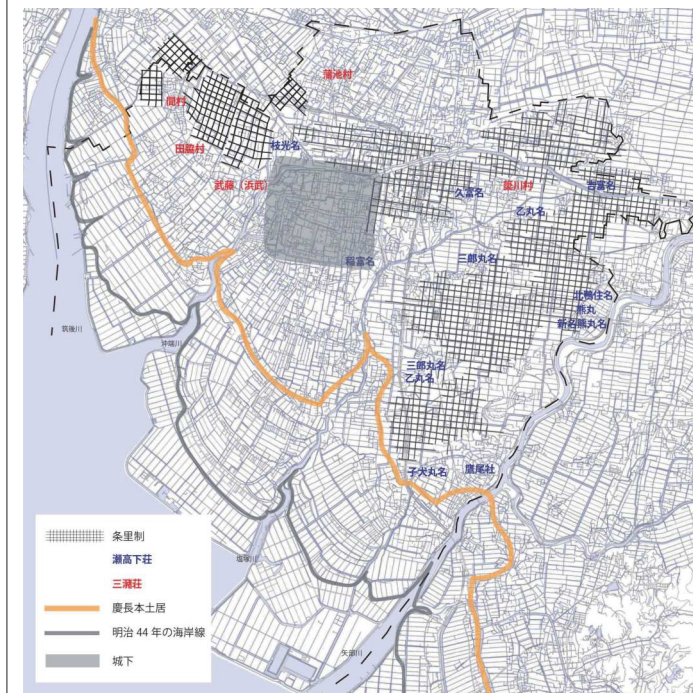


図1 統治の変遷と掘割

## 第3章 近代～現代

### 3-2. 広松伝 郷土の川に清流を取り戻そう

#### 3-2-1 広松伝略歴

柳川市に生まれ、昭和52年に柳川市環境課都市下水道係長となる。近代化によって荒廃した掘割の再生計画を打ち立てた人物。

#### 3-2-3 広松伝の思想

「郷土の川に清流を取り戻そうー柳川市民の呼びかけー」：掘割再生に向けての具体的な実地計画を述べた「河川浄化計画」の基礎となった文書のデータ化を行った。

広松は単に柳川の掘割を再生するだけでなく、その先に現代の人々にかつての日本人の水・自然に尊さを常に持っていた思想をとり戻そうとしていたと捉えることができ、そのためには特に住民主体の維持管理を重要視している。

#### 3-3 「水辺の遊歩道」事業

昭和53年柳川市は、に「伝統的文化都市環境地区整備事業」の指定を受け、これに伴って、昭和56年「水辺の散歩道計画」が実施される。

水辺の散歩道計画では、これまでであった掘割沿いの道の整備と、近世につくられた基盤上にはなかった新しい掘割沿いの歩道がつくられた。

明治20年代半ばに描かれた絵図より、城下地区は掘割・宅地・道路という並びの構成が多くみられる。

一方で、現代では「水辺の散歩道計画」に伴って掘割に沿った道がつくられた。すなわち歩道・掘割・宅地という並びができた。再生された掘割は、歩道という公共の空間と宅地の私有の空間の間で、人々に安らぎや潤い、ゆとりを与える、レクリエーション的空間機能が発生した。

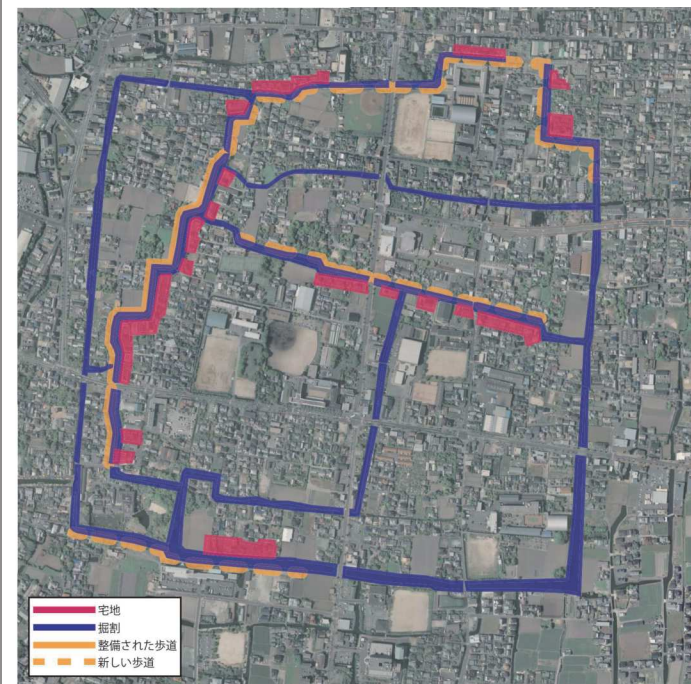


図2 現在の空間の並び

## 第4章 考察 柳川の掘割

第1章から第3章において、時代を下って、掘割の〈形態〉、〈機能/役割〉を明らかとした。

掘割の〈形態〉は古代から近世にかけて統治の変遷とともに形態を変化させ、田中吉政のもとでつなぎ合わされ、現在と同じ骨格を成している。〈役割〉では、人が柳川の地に住み始めた時は、軟弱地盤の地に定住するために排水の役割と、水を確保するための貯水の役割、条里制の時代に入り、灌漑の役割、荘園の時代では、荘園の集落ごとに掘割の排水の役割から荒地を干拓し、集落ごとに貯水、灌漑の役割を掘割が果たしたと考えられる。そして、田中吉政の時代に入り、藩政として計画的な都市計画と共に生まれた掘割は防衛という役割をもった。また、それまでの個々の掘割がつなぎ合わされ、連結された水利系統となったとき、灌漑の役割が飛躍したと考えられる。そして、近代から現在にかけて、〈形態〉は変化せずとも、都市の中でレクリエーションの場とする空間機能をもった。かつては生活用水、交通として使用され、防災、環境面では、遊水、涵養などの役割も果たす。つまり掘割は、時代時代によって役割の趣を変化させ、そして役割を拡大させ都市に根付いていると言える。すなわち、「掘割の役割の多様化」が柳川の水と都市の関係性の持続に影響していると考えられる。今後も形態は変わらずとも、空間的機能は拡大をみせるといえるだろう。しかしそこには住民による維持管理が必要であり、単に「掘割」を保存するのではなく、「掘割のある生活・住環境」を維持し、守っていくことが重要であるといえる。

### 【結論】

特殊な環境下のもと人々が定住するために必要不可欠であった柳川の掘割は、発生から近世にかけて、時代に伴って形態を変化させながら、柳川の地の基盤をつくった。また掘割の役割は、時代と共に役割の趣を変化させながら、多様化していくことを明らかとした。今後は特に空間的機能に拡大をみせると考えられる。そして、都市の中で「掘割のある生活・住環境」を維持し、守っていくことで、「掘割の役割の多様化」につながり、今後も水と都市の関係性が持続していくといえるだろう。

### 図版出典

図1 筆者作成

図2 筆者作成